

1. 授業の概観および状況

本授業は，中学校技術科の免許を取得するための必修科目である。1回生後学期に開講している。木材に関する基礎知識と加工するための工具・機械の仕組みや使用方法などの教授を主体とし，その中に実習を含めて講義を行う内容である。少しでも，専門教科になじむことや理解を高めるために，小テストを取り入れることによる時間外学習を促すことにしている。今年度は最終試験の前に単元終了時に4回の小テストを実施した。それらを含めて授業評価について報告する。

2. 授業評価方法

評価はディプロマ・ポリシー（以下DP）および科目独自のアンケートによる授業評価を使用した。受講人数は4名（中等教育コース技術専攻2名，小学校サブコース1名，特別支援1名）である。男女割合は男2名，女2名である。

3. 授業評価結果

DPのアンケート結果を図1に示す。

□：とてもそう思う ▨：ある程度そう思う

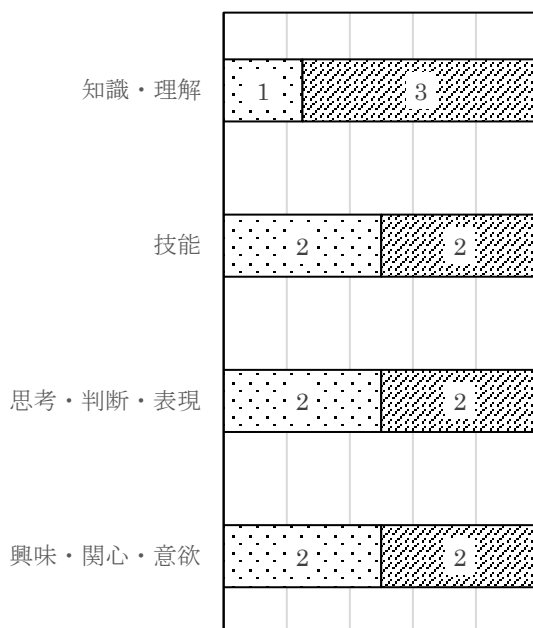


図1 DPについての回答結果

「知識・理解：教育と教職に関する確かな知識と，得意とする分野の専門的知識を修得している」では，4名が肯定的に回答している。この教科の学習目的でもあるので，授業者としては目標達成ができていると考える。

「技能：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている」では，4名が肯定的に回答している。

「思考・判断・表現：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について，専門的な知見をもとに，その対応方策を理論に基づいて総合的に考え，その過程や結果を適切に表現することができる」では，4名が肯定的に回答している。

「興味・関心・意欲，態度：教師としての使命感や責任感を持ち，自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ，自主的に社会に貢献しようとする」では，4名が肯定的に回答している。

教員側が本授業に意図していない評価項目については，学生が教員になったことを想定した立場で肯定的に回答していると考えられる。

「この授業で出された課題や予習・復習のために，授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。」の質問では0.5～2時間（平均：1.3時間），また，「この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で，この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。」の質問では0～1時間（平均：0.5時間）であった。評価と比較すると，授業時間外の学習をしている学生ほど評価は高くなる傾向が見られた。

科目独自のアンケート質問内容を表1に示す。また，科目独自アンケート回答結果を図2に示す。

表1 アンケート質問内容(科目独自)

設問番号	設問内容
(1)	教員の話し方や説明により、授業内容(概念、理論など)が、わかりやすく講義された。
(2)	授業の内容・レベルはあなたにとって適切だった。(5段階評価)
(3)	授業を受講した目的が達成された
(4)	本授業により新しい知識、概念、技能を見につけることができた
(5)	技術専修の他の講義に関して興味・関心がわいてきた
(6)	木材・木材加工に対して興味・関心がわいた
(7)	実際に木材を加工して製品を作製してみたい
(8)	ミニ試験を行うことで、学習の復習するきっかけになりましたか?

□ : ++ ▨ : +

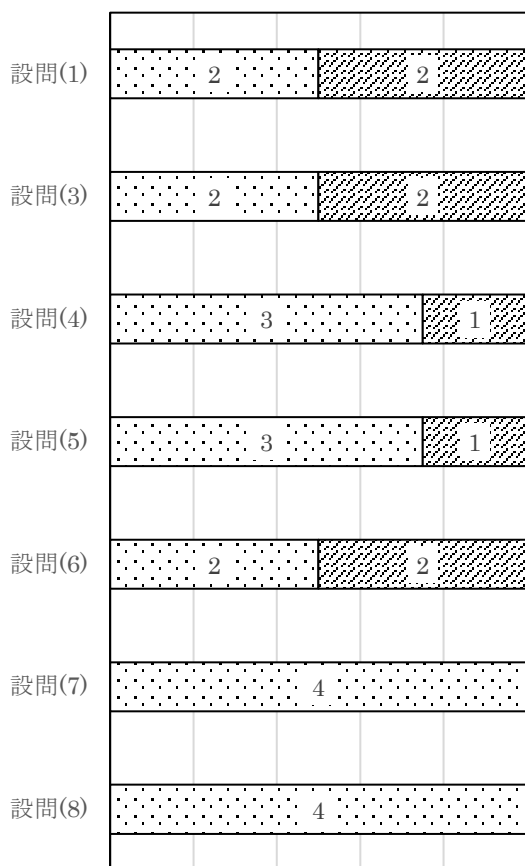


図2 科目独自アンケート結果

どの項目についてほぼ肯定的な回答を得た。設問(2)の難易度については、「適切」が2名、「やや難しい」が2名であった。

平成28年度から中等教育コース技術専攻が設置された。定員は3名である。今年度は2名の在籍である。これまで、初等教育志望の学生が技術専修に第1志望ではない学生がほとんどであった。技術専攻なので基礎的な知識を押えるためにも、授業内容の節目に4回の小テストを行った。前もって実施は予告している。得点率は第1回目が37~49%、第2回目が26~59%、第3回目は13~31%であった。第4回目は25~54%であった。予告しているにも関わらず学習していないことが推測される。期末試験は4回の小テストの内容を半分は出すので必ず学習しておくように指示をしておいた。期末試験の得点率は60~80%であった。まずまずの得点率である。ところで、4回の小テストの範囲外の得点率は、34~49%と低いものであった。専門の教科ということもあり興味・関心はあるもののそれが知識として実を結んでいないことがわかる。また、これら専門教科の勉強の方法がわかっていないと思われる。自由記述では、授業の後半に行った実習のことが多く書かれており、学生には断片的にしか知識が残っていないように感じた。

最終評価の内訳は、優：3名、良：1名であった。

おわりに

15回の授業に適宜小テストを取り入れることの効果は昨年までであったように感じたが、今年度はいまひとつなかった。最初に授業全体を俯瞰させるようにして、技術教員に「なぜ必要か」をいつも認識させるようにすれば、知識の定着に結びつくと考える。来年度から、小テストの在り方を見直し、授業の工夫を行っていききたい。